オガグワの森　平成29年度　取組結果

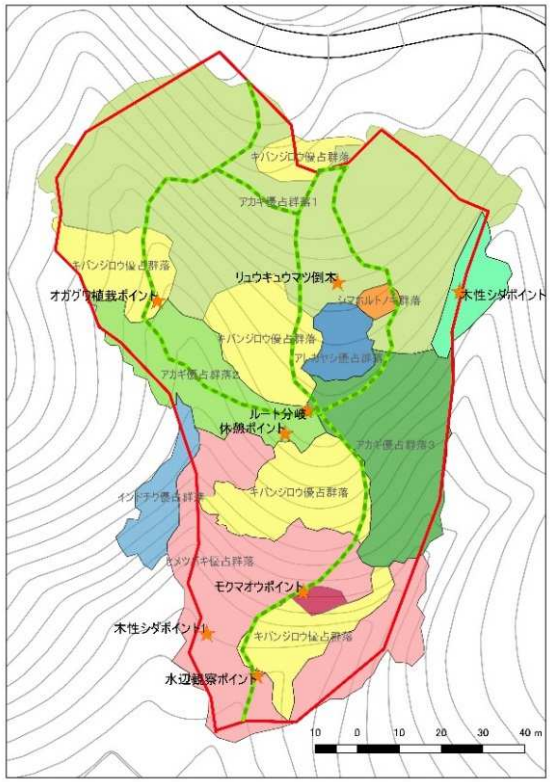
目的

◆村は、「人と自然の共生する村づくり」を村政の基本理念に掲げ、返還50周年を迎える。
◆小笠原固有の樹木「オガサワラグワ」をシンボルとした森づくりを村民参加・協働で取り組み、小笠原の自然を身近に感じられる場と機会を創出する。
◆林木育種センターとの連携により希少種の保護にも貢献する。

プロジェクト準備状況

◆平成28～29年度
現況調査（植生調査等）、残地材整理、ルート設定を実施
今後、森づくり計画を策定予定
◆平成30年1月～
林木育種センターからクローン苗が順次到着し、野生研が順化を開始

１月のおが丸で里帰りした
父島産オガグワのクローン苗



予定地：父島の長谷ダム上流の農地跡の二次林

村民参加の取組

◆平成29年8月27日：生きもの観察、森づくり体験
◆平成30年1月20日：森の地図づくりイベント
◆平成30年2月4日：道づくり体験会

平成30年度の予定

◆4月～：植栽予定地でのアカギ駆除、ルートづくり、環境整備
◆11月：返還50周年を記念して第1回植栽イベントを実施

今後の課題

◆将来像（植生、利活用）の検討と共有
◆継続的な維持管理体制の構築

オガグワの森　平成30年度　取組結果

目的

◆返還50周年を契機として小笠原固有の樹木「オガサワラグワ」をシンボルとする自然を身近に感じられる場と機会の創出
◆林木育種センターとオガサワラグワ保全に関する覚書を締結

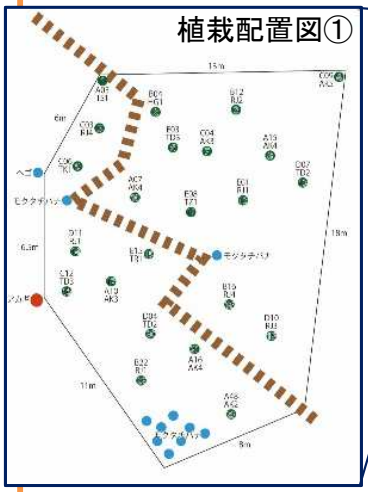
これまでの経緯

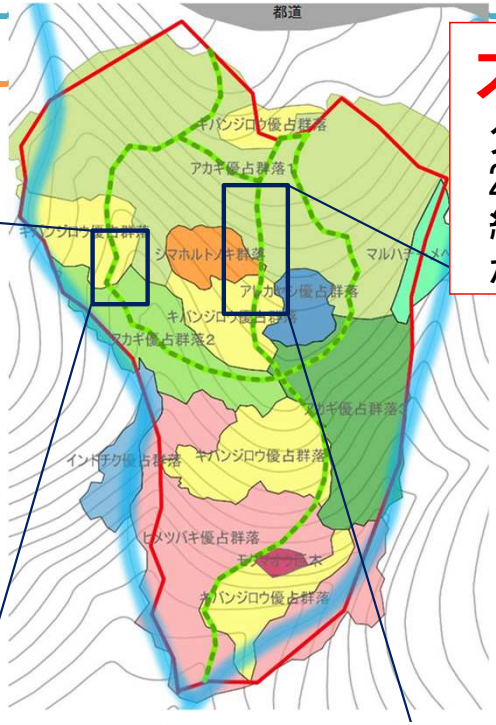
◆平成28～30年度
・現況調査（植生調査等）、残地材処分、アカギ大径木伐採、ルート設定等を実施
・**生き物観察や地図づくり、道づくりイベントを開催**
◆平成30、31年の1～3月
・林木育種センターからオガサワラグワのクローン苗が到着し、野生研が順化・育成

今後の課題

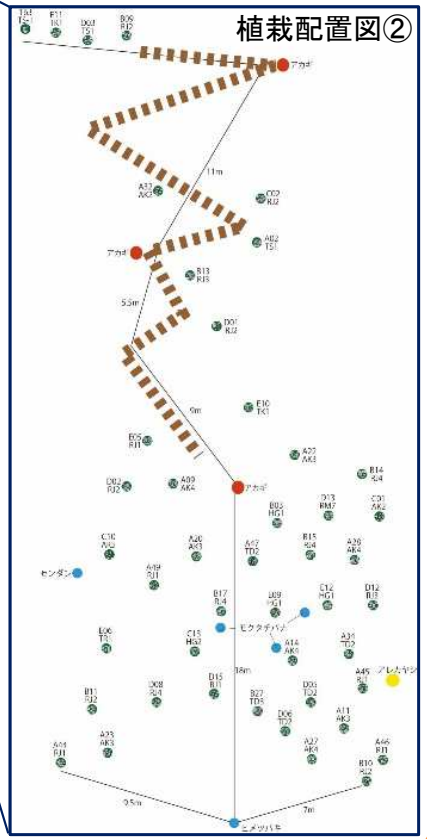
◆将来像（植生、利活用）の検討と共有
◆継続的な維持管理体制

進捗状況





オガグワの森
父島の長谷ダム上流の2つの沢に挟まれた約1haの在来種と外来種が混成した二次林



実施日	参加村民（スタッフ）	内容
H30.5.6	25名（6名）	林内の片付け
H30.9.8	38名（10名）	道づくり
H30.12.9	71名（23名）	在来種の植樹
H31.3.16	（実施予定）	維持管理

母島の森　平成29年度　取組結果

目的

◆村は、「人と自然の共生する村づくり」を村政の基本理念に掲げ、返還50周年を迎える。
◆母島には湿性高木林の中に希少な動植物が生息しているが、遺産地域の森林は厳正に保全が図られているため、村民や来島者が母島らしい植物を身近に見られる場を創出する。
◆林木育種センター等の関係機関、島内協力者との連携により希少種の保護にも貢献する。

プロジェクト準備状況

◆平成29年12月～
アドバイザーとして東京農業大・田中信行教授（科学委員）を招聘し、植栽箇所や樹種、作業の進め方の検討を開始

◆平成30年1月～
林木育種センターからオガグワ苗が順次到着し、島内協力者による順化を開始

予定地：母島字静沢の避難路を兼ねた散策路

村民参加の取組

◆平成30年1月21日
：道づくり体験会

◆平成30年3月6日
：田中教授来島
・関係者による予定地の地拵え
・講演会「母島の植物ハハジマの森づくり」

平成30年度の予定

◆4月～：ルート沿いの外来樹木駆除、地拵え、樹種検討
◆11月：返還50周年を記念して第1回植栽イベントを実施

今後の課題

◆将来像（植生、利活用）の検討と共有
◆継続的な維持管理体制の構築

母島の森　平成30年度　取組結果

目的

◆返還50周年を契機として村民や来島者が母島らしい植物を身近に見られる場と機会の創出
◆林木育種センター、島内協力者等との連携により希少種の保護にも貢献

これまでの経緯

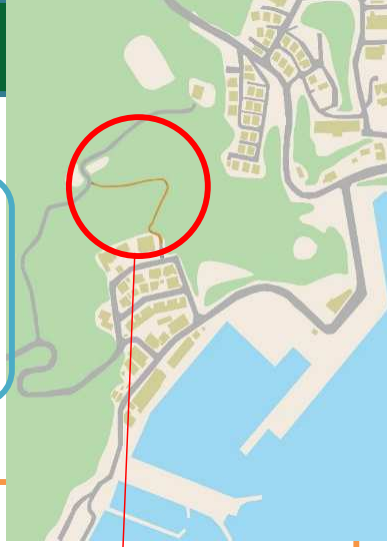
◆平成29、30年度
・東京農業大・田中信行教授をアドバイザーとして招聘
・植栽箇所や樹種、作業の進め方の検討を開始
・シマグワ・アカギ大径木の伐採
・**講演会や道づくりイベントを開催**
◆平成30、31年の1～3月
・林木育種センターからオガサワラグワのクローン苗が到着し、島内協力者が順化・育成

今後の課題

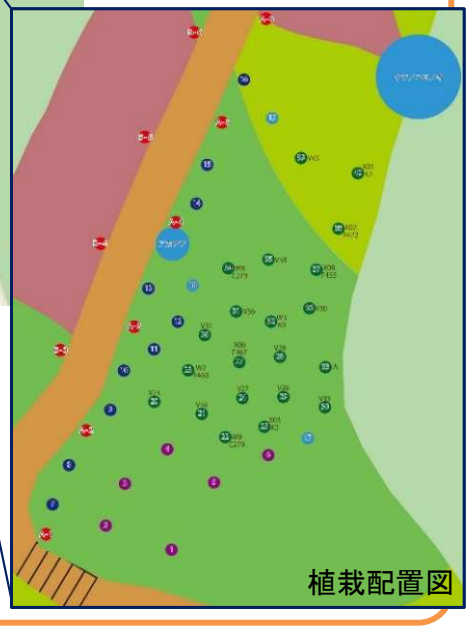
◆将来像（植生、利活用）の検討と共有
◆継続的な維持管理体制

進捗状況

実施日	参加村民（スタッフ）	内容
H30.5.12	7名（5名）	ギンネム伐採
H30.8.25	4名（5名）	地図づくり
H30.11.11	23名（7名）	在来種の植樹
H31.3.21	（実施予定）	維持管理



母島の森
母島の静沢集落北側のギンネムが繁茂する避難路を兼ねた散策路沿い


植栽配置図

村民参加の森づくり　平成29～令和元年度　取組結果

目的

◆返還50周年を契機として小笠原固有の樹木「オガサワラグワ」を中心に村民や来島者が自然を身近に感じられる場と機会の創出
◆林木育種センター、島内協力者等との連携により希少種の保護にも貢献

これまでの経緯

◆**オガサワラグワ**（平成29年～）
・林木育種センターからのクローン苗を島内協力者が順化・育成
◆**オガグワの森**（平成28年～）
・現況調査、 残地材処分、アカギ大径木伐採、ルート設定・整備
◆**母島の森**（平成29年～）
・東京農業大・田中信行教授らと植栽箇所や樹種、作業の進め方を検討
・シマグワ・アカギ・ギンネム・ササの薬注・伐採

今後の課題

◆将来像の検討と共有
◆継続的な維持管理体制

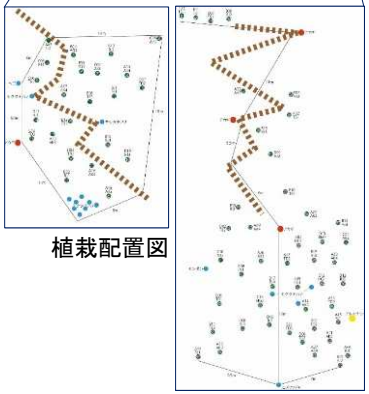
進捗状況

オガもり	村民（スタッフ）	内容
H29.8.27	17名（17名）	生き物観察
H30.1.20	26名（14名）	地図づくり
H30.2.4	42名（9名）	道づくり
H30.5.6	25名（6名）	林内の片付け
H30.9.8	38名（10名）	道づくり
H30.12.9	71名（23名）	オガグワ植樹
R1.5.6	21名（8名）	苗計測など
R1.8.31	26名（6名）	片付け、イスづくりなど
R2.2.29	21名（7名）	アカギ、キバンジロウの伐採

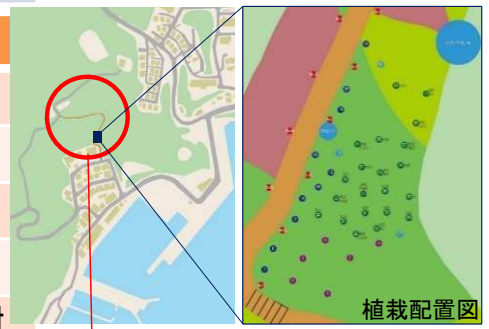
ハハもり	村民（スタッフ）	内容
H30.1.21	10名（9名）	道づくり
H30.3.6	ー	講演会
H30.5.12	7名（5名）	ギンネム伐採
H30.8.25	4名（5名）	地図づくり
H30.11.11	23名（7名）	在来種の植樹
H31.3.21	8名（7名）	苗計測など
R1.6.8	16名（7名）	在来種の植樹
R2.2.15	12名（5名）	ササの根除去

オガグワの森

父島の長谷ダム上流の2つの沢に挟まれた約1haの在来種と外来種が混成した二次林



植栽配置図

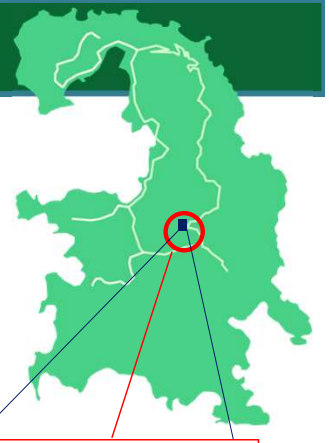


植栽配置図

母島の森

母島の静沢集落北側のギンネムが繁茂する避難路を兼ねた散策路沿い

村民参加の森づくり　令和２年度　取組結果



目的

◆返還50周年を契機として小笠原固有の樹木「オガサワラグワ」を中心に村民や来島者が自然を身近に感じられる場と機会の創出
◆林木育種センター、島内協力者等との連携により希少種の保護にも貢献

これまでの経緯

◆**オガサワラグワ**（平成29年～）
・林木育種センターからのクローン苗を島内協力者が順化・育成
◆**オガグワの森**（平成28年～）
・現況調査、残地材処分、アカギ大径木伐採、ルート設定・整備
・主なイベント内容：生き物観察、地図づくり、植樹、レク利用 など
◆**母島の森**（平成29年～）
・東京農業大・田中信行教授らと植栽箇所や樹種、作業の進め方を検討
・シマグワ・アカギ・ギンネム・ササの薬注・伐採
・主なイベント内容：ギンネム伐採、地図づくり、植樹、苗の計測 など

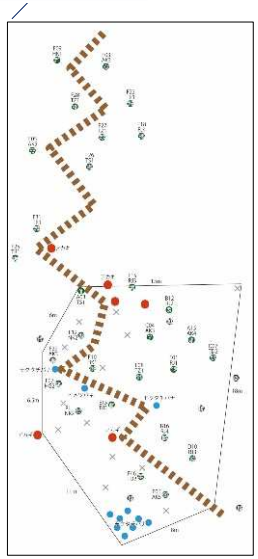
進捗状況

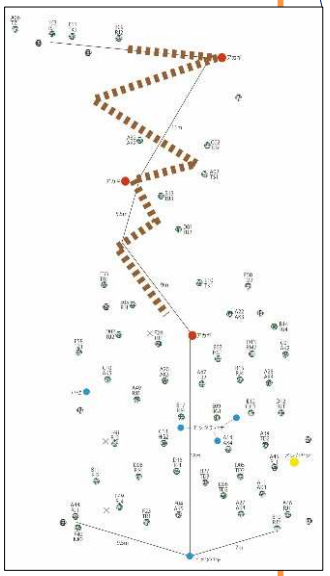
オガもり	村民（スタッフ）	内容
R2.8.10	34名（10名）	片付け・レク利用
R2.12.13	37名（9名）	オガグワ植樹

ハハもり	村民（スタッフ）	内容
今年度はイベント未開催。スタッフで植栽地の手入れや整備、苗の植栽を実施		

オガグワの森

父島の長谷ダム上流の2つの沢に挟まれた約1haの在来種と外来種が混成した二次林





植栽配置図

母島の森

母島の静沢集落北側のギンネムが繁茂する避難路を兼ねた散策路沿い

課題・今後の対応

◆将来像の検討と共有
◆継続的な維持管理体制

村民参加の森づくり　令和３年度　取組結果

目的

◆返還50周年を契機として小笠原固有の樹木「オガサワラグワ」を中心に村民や来島者が自然を身近に感じられる場と機会の創出
◆林木育種センター、島内協力者等との連携により希少種の保護にも貢献

これまでの経緯

◆**オガサワラグワ**（平成29年～）
・林木育種センターからのクローン苗を島内協力者が順化・育成
◆**オガグワの森**（平成28年～）
・現況調査、残地材処分、アカギ大径木伐採、ルート設定・整備
・主なイベント内容：生き物観察、地図づくり、植樹、レク利用 など
◆**母島の森**（平成29年～）
・東京農業大・田中信行教授らと植栽箇所や樹種、作業の進め方を検討
・シマグワ・アカギ・ギンネム・ササの薬注・伐採
・主なイベント内容：ギンネム伐採、地図づくり、植樹、苗の計測 など

進捗状況

オガもり	村民（スタッフ）	内容
R3.11.27	27名（14名）	オガグワ植樹
R4.1.29	11名（10名）	階段づくり

ハハもり	村民（スタッフ）	内容
R4.1.15	17名（9名）	オガグワ植樹

オガグワの森

父島の長谷ダム上流の2つの沢に挟まれた約1haの在来種と外来種が混成した二次林

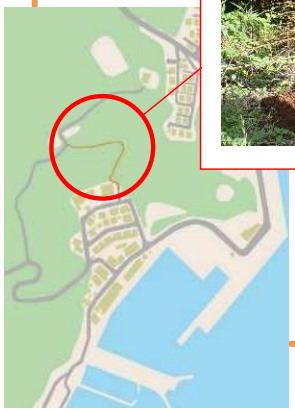
植樹風景

階段づくり風景

母島の森

母島の静沢集落北側のギンネムが繁茂する避難路を兼ねた散策路沿い

植樹風景



課題・今後の対応

◆将来像の検討と共有
◆継続的な維持管理体制